二〇一六年度鷹陵史学シンポジウム　パネルディスカッション

司会　渡邊忠司

総合司会（安）　それでは定刻となりましたので、パネルディスカッションに移りたいと思います。渡邊忠司先生、司会の方をよろしくお願いいたします。

渡邊　ご苦労様です。報告者のみなさんコメントを頂きまして、ありがとうございました。シンポジウムということで、ディスカッションに移りたいと思います。華族というのは、あまり身近に感じられないということも多いかと思います。私はこの夏に鹿児島のほうに旅行しまして、ある居酒屋に入ったのですが、これは何も作り話では絶対ないのですが、その横に座った人が何か話しかけたそうにしていたのです。何かお話があるんですかって聞いたら、いろいろ話していると、最後に私は元華族なんだっていう言い方をされてました。薩摩藩の家老職にあって、男爵だったんだっていう話をされました。一瞬、やっぱそういう人がいるのだなと思いながら、改めてこのシンポジウムの事を思い聞いていました。もちろんそれ以上深くは聞きませんでしたが、やはりそういう人たちは、とりあえず戦後になって、華族という一つの身分というのが表だって消えてしまったということは、意識はされていました。心の中には自分たちはまだ華族なのだと、霞会の話もちゃんとされていました。そういうこともありまして、私自身も大変この報告、後藤先生の報告や水田先生の報告も、すごく興味をひかれて楽しみに実は色々聞いていました。私の専門は日本近世史であり、直接近代史に関わってはおりませんが、貴族とか華族の事もあまりやっていないので、分からない部分とかもあったのですが、今日はいろいろ教えて頂いて、大変ありがたいと思っています。シンポジウムを進めるにあたって、まず質問用紙をお配りしておりましたので、シンポジウムに対するご意見がいくつか出ていますので、そちらを先にして、それから後に、各先生方への質問が来ていますので、引き続き、議論とかみ合わせながらやっていきたいとに思っています。協力のほど、よろしくお願いします。

　最初に、このシンポジウムの趣旨に対するご質問だろうと思いますので、その質問を読み上げて、趣旨説明をした方に直接お答えを頂きたいと思います。内容は、自らに対する自己変革の要求、同時

渡邊先生

代化の波で、彼らは自らの地位をどのように理解していたのか、どう理解していたのかというご質問です。同時代化ということについて、意味合いの説明を改めてして頂きたいということになるかと思います。また、水田先生の資料を見る限り、イギリスの貴族の特徴である世襲という制度については、日本の場合はどうだったのだろうか、またこうした特徴の体現者たる貴族階級、そのことについて同じく日本ではどのように捉えられていたのかという、その同時代化ということの意味合いについての質問がありました。また、これも同じ同時代化の事に関して、報告者はそれぞれ括弧つきの同時代化をどのように捉えているのか教えて頂きたいという質問がありました。お一人は氏名が無いのですが、もう一人の質問者は片山さんなのですけど、片山さんおられますか。いいですかこれで質問は。それでは同時代化について、もう一度説明をしていただけますか。

藤田　趣旨説明をさせて頂いた藤田です。僕は日本史を専攻しているのですが、同時代化という言葉自体は、日本史ではあまり聞かない言葉でして、僕自身もこのアイデアというのは、イギリス史の水田先生の方のアイデアを参考にさせてもらって、考えておりました。趣旨のところでも説明させてもらったのですが、簡単に言ってしまえば、時代遅れとなった体制や思想を今、その当時に適合させようという圧力、時代の要求ということを僕の中では想定してます。最初にこの同時代化という言葉を用いた時には、近代化だとか民主化というものも含まれるのかなという風には考えていたのですが、近代化や民主化というのはやっぱり未来、先をどうするかということでもありますので、少し違うのかなと。そう考えたときに本当に今の社会情勢そのものに貴族たちがどう適応していくかということが、同時代化、そうさせる力、またそうしていくことも同時代化という言葉ではないかなという風に、僕の中では簡単にですが、ボヤっとしていますが考えてます。

渡邊　今、時代遅れのものを、単純に言ってしまうと、今に合わせることなのだと解釈してしまっていいのかなと思うのですけれども、もう一つ、それぞれの報告者が、この同時代化ということをどのようにとらえているか、ということを教えて下さいということもありますので、それぞれ後藤先生から、お話をいただき

たいと思います。

後藤　はい、私も実は藤田さんとほぼ一緒で、歴史的な存在でもある華族というのはその時代状況の中でどういう風に適応しようとしたのか、という問題意識の中でこれを考えてみました。

渡邊　それでは、水田先生もお願いします。

水田　ありがとうございます。私も先ほどの趣旨にある程度合わせて考えておりますので、同時代化というのは、そういう圧力であると。つまり、その時代に合わせようとするものであると思います。より具体的に言ってしまうならば、今回の報告ではモダナイゼーション（modernisation）の翻訳として、私は「現代化」、そして「同時代化」の語を使っています。現代化という用語自体は、政治学などでモダナイゼーションの翻訳として使用されているものです。例えば政府、ウィルソン政権は当時、現代化をキーワードの一つにして政策を行っています。もちろんその際には、貴族院改革に対しても現代化が必要だと、彼らは考えていました。貴族院ないしは貴族たちにとって、そういった外から来る圧力、院外から来る外圧のことを「現代化」と捉えた場合、逆に貴族院の中もしくは貴族たちの側から、それに対して自分たちも時代の趨勢に適応していかなくてはいけないのではないか、または自らの何かしらを変えていかなければいけないのではないかと認識し、変わらない貴族院であり続けるために自分たちから変えていこうとする力、すなわち内圧といえるものがあるのではないかと考えました。そういう内圧の部分、院内から出てくるもののことを、今回の報告では「同時代化」と表しています。ですので、もしも再翻訳するのであるならば、両方ともモダナイゼーションという言葉になるのでしょう。けれども、特に同じ言葉で、外からの圧力と内からの圧力を一緒に表わすと、今回の話は見えにくくなると思います。その点、藤田さんや後藤先生が考えていらっしゃるように現代化の二つの面を一つの言葉で表すのではなく、現代化と同時代化のように使い分けられるのではないか、と考えています。ただし、同時代の社会への適応という意味では、それらは共通した危機感だったのではないかと捉えてもいます。

渡邊　ありがとうございました。コメンテーターはよろしいですかね。一応報

後藤先生

水田先生

告者ということで、二人の報告者に同時代化ということについて、今の水田先生のお話によると、水田先生の場合は内側から出て来る圧力によって現代化していくということと一緒なんだ、同じことなんだという風にお答えをいただきました。質問されていた方、片山さん、何かご意見ありますか。

フロア1（片山）　はい、ありがとうございます。

渡邊　もう一人の方、あっ、名前がなかったですね。

フロア2（貝先生）　すいません。ちょっと補足すると、今の水田先生の話をお聞きしてやっぱりはっきりしたのですが、貴族自身が例えば世襲というのが一番わかりやすいわけですが、制度のようなものとして後から与えられたものではなくて、言わばあらかじめ既に持っているものなわけですよね、世襲というようなものは。それが例えば水田先生の史料を見ると、言わば貴族自身がそこでこう揺れている部分がすごく如実に出ていて面白いなぁとは思ったのですが、それが日本の場合であれば、例えば日本の華族においてはどうなったんだろうということが具体的にわかるとすごく面白いんじゃないかなぁと思いました。それから、日本の華族の場合であれば、やはり華族が旧大名家もあれば、それから明治維新の功労者のように相当に幅を含んでいますので、その幅の違いというか、いわば一種の華族の中の階層のようなものだと思うのですが、それぞれの人たちの間で、そういう意識に違いはあったのかなぁという所がお聞きしたかったところです。

渡邊　詳しい補足説明がありましたが、後藤先生、何かコメントがありましたらよろしくお願いします。

後藤　大正期や昭和戦前期の華族は大変悩んでいます。大体約千家あるという言い方をしましたけれども、かなりの華族が悩んでいます。なぜかというと、相当批判にさらされていて、その時にいろんな案も出てきます。華族は五爵ありますけど、その世襲自体について非常に疑問を感じるとか、あるいは、華族じゃないですけど皇族について、いわゆる伏見宮系というのが大きく広がって明治以降存在し、昭和二十二年に皇族離脱を強制的にさせられますけれども、伏見宮系皇族についても批判が強く、戦争に負けなくてもいずれ離脱していた状況でした。華族の数というのも、昭和戦前期になる

と先ほど千家くらいあると言いましたけど、減っています。爵位を返上する家も出てきて、全般的に世襲に対する批判についてかなり深刻に受け止めているという印象を持っています。その華族の中で、やはり新華族は、大名華族と公家華族とかなり違う気がします。新華族の場合はほぼ男爵です。例えば旧大名だと大体二十万石クラスが伯爵ですけど、いわゆる一万石以上の小大名は子爵なんですね。侯伯子のところに集まって、公家はもう一個ずつ上ぐらいのイメージですけれども、その中で、彼らの意識というのはやはり新華族とは違って、歴史的な存在としてあるなあという印象は持っています。

渡邊　ありがとうございました。

水田　少しだけ付け加えをさせてください。先ほどおっしゃった世襲ということですが、貴族院での改革に関するディベートなどを見ていても、よく言及されているのが世襲原則（principle）です。これは、世襲が貴族院の原則であるということです。そういう意味では、貴族たちは、世襲とは制度ではなく、もともと絶対にあるものなのだと考えていたようです。それがなぜ出てくるのかというと、一つは爵位の強さがあると思います。簡単に言うと、イギリスでは爵位返上ができません。後継ぎは爵位を必ず継がないといけないのです。例えば、基本的に貴族院議員は庶民院に入ることができません。親族から爵位を引き継いだ場合、その人物が庶民院で議員職に就いていたとしても、彼はもう庶民院に原則的に立ち入ることが許されないのです。彼らは爵位を放棄する、もしくはほかの人に譲渡するということも許されません。一九六三年になって、ある事件が起こりまして、ようやく返上ができない代わりに、一代に限り爵位を凍結することが認められるようになりました。その結果、貴族院に行かずに庶民院で議員を続けることができるようになった代わりに、その人が亡くなったら爵位を復活させ、彼の子供や後継者に継がせる、というシステムになりました。この意味で、イギリスでは爵位の強さというものを考えることができます。だからこそ一九六〇年代には逆に、世襲原則というものを説明する責任が彼らには出てしまったのではないでしょうか。今まで当然の如く思っていた世襲が、実は社会にとっても非常に重要であり、有用であることを、貴族たちは言葉にして説明しないといけなくなってくるという、動揺という意味ではまさに動揺なんですけれども、そういう対応をせざるを得なくなっていくのがこの時代に起こったことだったのではないかと、私は捉えました。

渡邊　貝先生、よろしいですか。今色々と華族の階層性などに関するコメントも出ました。近世から明治維新にかけて、確かに大名、それから公家、それ以

外の新華族というのが出てきます。そういう存在、実はこれは私が気になっているのですが、例えば、大名はちゃんと自分の領地とか領国を持っていたのが、明治維新になるとそれが秩禄処分の中で全然無くなっていく中で、公家もおそらくそうなんだと思うのですが、確固たる基盤が、財政的基盤もそうなんでしょうけど、金はもらっているにしても、永続的に維持するための基盤がかなり弱くなっていくのではないかという風に思います。イギリスの場合も恐らく世襲ということをせざるを得ない状態に置かれているというのは、その前提となっている基盤、財政的な基盤かもしれません。おそらく土地だろうと思うのですが、そういうものはあるのだろうと思うのですが、そういう華族あるいは貴族が自分たちを維持していくというか、あるいは宿命づけられたところに、どうしても自分たちを変革していかなければならないところの一つの要因はあるのかなぁと思いながら、聞いていました。華族が、今回のシンポジウムは「生き残りの政治史」でありますので、その生き残るための方法とか、どういう風に考えてきたのか、どういう風に対処してきたのかというのが、後藤先生の話の中にもありましたし、水田先生の話の中にもありました。とりあえず質問の事項がもう少しありますので、そちらの方を先に済ませたいと思います。

これは後藤先生への質問ですが、これは金子さんですが、近衛家以外の摂家の動向はどうだったのか。例えば、貴族院改革とかそういうのがありましたけど、積極的に改革を望んだのか、それとも五摂家での連携なのか、意思統一などは行われたのか。そもそも摂家という枠組みでの連帯意識はあったのか、という質問が来ています。近世とかまではいいとして近代に五摂家とかあったのだろうかという事も気になりますが、そういう系譜を持った公家、あるいは貴族、華族に連帯意識はあったのだろうかと質問がございました。これに対して後藤先生お答えいただけますでしょうか。

後藤　はい。実は近代になっても、華族というのは大名華族や新華族とありますけど、公家は別格です。昭和天皇や明治天皇もそうなのですけども、公家は別格に扱ってます。特に五摂家は格別で、天皇が彼等だけを集めたりもしていますし、何か困ったことがあったらお金を下賜することもやってもいます。人間関係も含めて、五摂家は五摂家でその交流は当然あります。また基本的に彼らは公爵ですので、自動的に貴族院の議席も持っています。先ほどの貴族院改革の中で、火曜会というのは公侯爵議員を中心に結成したと話しましたが、彼らの多くはその火曜会に入っていますが、それでは活動に積極的であるかというと、一部の人でしかありません。二条とかは積極的か

なという印象は持ちますけども、ただ、貴族院改革の中で中心なのは、近衛文麿とか佐々木行忠とか先ほど出てきたような、いわゆる華族革新派で、他の五摂家はいなかったと思います。そこまで積極的にやってるという印象はありません。

渡邊　金子さん、何か質問の補足とか、よろしいでしょうか。

フロア3（金子）　はい。

渡邊　よろしいですか。金子さんがもう一つ質問をつけられているのですが、貴族そのものに対する社会の認識はどの程度意識されていたのかという質問がもう一つ来ています。後藤先生、よろしくお願いします。

後藤　それはやはり大正デモクラシー状況、それからファシズムになっても非常に厳しいものがあったと思います。有馬頼寧を例に挙げると、当然わかっています。有馬にとって世間からの評判で一番嫌なことはバカ殿扱いされるということです。先ほど李先生の話で、倉富の話がありましたけれども、倉富勇三郎というのは、旧久留米藩の士族で、大体出世した人間が、そこの大名華族の家政相談人というのになるんですけども、そこから倉富は有馬家の面倒をみていきます。有馬は女性関係がひどいんですが、倉富はこの女性関係を問題視します。ただ、有馬頼寧からすると、倉富は俺のことをバカ殿扱いしやがってと反発をしている。そういう感じで、貴族に対する、社会に対する、漠然とした批判は承知して行動をしていると思います。

渡邊　金子さんよろしいですか。

フロア3（金子）　はい、ありがとうございます。

渡邊　それから次にこれも後藤先生に対する質問です。桐山紗矢香さんからですが、レジュメの表1で信愛会に女性を入れよう、十月七日という内容がありますが、結局信愛会に女性は入会しなかったのでしょうか。華族の女性たちは華族革新派の思想と行動に関わりはなかったのでしょうか。同じ女性として気になりました。桐山さんは、何か補足はありますか。よろしいですか。

フロア4（桐山）　いえ。

渡邊　後藤先生、よろしくお願いします。

後藤　おそらく、信愛会に女性は入っていないと思います。例えば園遊会みたいなものとか、一緒にどこか行くときに、家族を同伴してというのはもちろんありますが、活動の中心として、女性がやっていることはないです。有馬頼寧には愛人がいるのですが、それで一緒に動いているというのはあるのですけども、その正規の会員としてというのは、ないです。先ほどのコメントのお答えにもなってくると思うのですが、基本的に彼らは自身の生き残り方を模索しており、社会主義に対してどう考えているかというと、あ

まり感化はされていないです。個別の政策での社会主義への共鳴はあるのですけれども、基本的に彼らは保守です。一方、女性に対しては、彼らは白樺派の人たちとほぼ同じで、人道主義という考え方を持っているので、そういう意味で、女性に対する意識ももちろんあります。しかし、自分たち華族がどう生き残るんだという問題意識から動いてるので、基本的に彼ら華族のメンバーを中心にやっていると思います。

渡邊　はい、ありがとうございました。桐山さんよろしいですか。

フロア4（桐山）　はい。

渡邊　社会運動とか社会事業に積極的に出て行って、自分たちの生き残りを考えたところからすると、女性に対してもそういう考え方はそうでもなかったという、そういう答えですけども。華族の生き残りの一つの形として、信愛会とかそういうことが色々作り上げられていたということですが、その中に女性は入っていなかったということです。

さらにもう少し、水田先生のほうに質問が来ています。貴族の自己改革というテーマに関連して、英国貴族には特に権威は無いとのことでしたが、英国にも爵位の斡旋などで金品を得る、売官のような腐敗は存在しましたか。これは國原健司さんからの質問です。なにか補足質問はありますか。いいですか。水田先生、よろしくお願いします。

水田　ありがとうございます。売官という制度は官職、つまりは文官であったり武官であったりという形であるならば、近代までイギリスにもありました。ただその場合、なぜ売官、いわゆる官職の売り買いをするのかというと、官職には例えば年金や恩給がついていて、それを持つことが財産となるからです。そういった＋αのお金をもらえるなど、恩典がありましたので、官職の売買という事態が発生しました。一方、先ほども申し上げましたが、基本的には貴族院議員は手弁当です。そのため、爵位の保持、特にそれを貴族院に出る権利という意味で考えた場合、爵位を保持していても何ら儲かりません。また国王にしか爵位の任命権はなく、制度としても不可能です。以上のことから、爵位を売り買いするというのは、やっても利益がない分、売官制の形はとられないと思います。

渡邊　はい、ありがとうございました。日本の近世の中だと武官・官人などは買うとかそういうことはあるのですが、そういうのはできない。儲からない、できないということです。それから、後藤先生とそれから水田先生のところにもう一通来ていますので、それを先に行きます。日本の華族の状況について公家の家柄、例えば近衛以外の摂家九条・二条・一条とか、鷹司とか。冷泉家といった家柄の人たちは、近衛文麿が活躍している間は、

何か活動はしていたのでしょうか。これもお願いできますか。

後藤　はい、これも先ほどの五摂家についての質問と一緒で、貴族院議員であるし、公侯爵なので、火曜会に属して動いているのですが、近衛文麿に比べれば、そこまで目立つような動きはしていないと思います。

渡邊　こちらは西山さんからの質問でしたが、補足はよろしいですか。

もう一つ、水田先生の方にだと思うのですが、同じ西山さんからの質問です。英国貴族の世襲について、世襲とは無条件にできるものなのか、もしくは何かしらの理由によって世襲が認められない場合があるのか。先ほどちょっとお答えがあったようですけど、よろしくお願いします。

水田　ありがとうございます。世襲自体には、要件は恐らく無いと思います。特に六〇年代以降の話をしますと、創設貴族を世襲にするか、それとも一代にするのかは完全に首相の意向です。どちらかといえば一代貴族の方が作りやすいとされています。つまりはその人だけで爵位が終わるので、経済的な負担やその他のものを後継者に負担させることが無く、そのため一代貴族を作ってしまう方が楽といえるのです。この点から、一代貴族が増えていきました。例えば特に七〇年代以降、世襲貴族をサッチャーが四人増やしました。別に一代でも世襲でもおそらく問題はなかったのでしょうが、論功など、いろいろな理由があったのかもしれません。それでもサッチャーが世襲貴族を作ったことは、当時かなり驚かれました。因みにブレアも一人、世襲貴族を作っています。しかし、何らかの理由はあったにせよ、一代で問題があったという事では恐らくないと思われます。結局、世襲か一代かという判断は首相の考え、つまり首相やそれを取り巻く環境の問題だと考えることが出来ると思います。

渡邊　西山さん、よろしいですか。会場からの質問、報告に対する事実確認などの質問を中心に行ってきました。先ほど李先生が、多くのコメントを出しておられました。この点については、次に行ってもらうとして、清水先生の方からいくつか質問があるとお聞きしていますので、清水先生、お願いします。

清水　先ほどは後藤・水田両先生の報告に対する直接のコメントをしないで、中国（清末）の話だけに終始しましたので、ここでお二人の報告に対する質問をさせていただくことにしたいと思います。まず後藤先生の報告に対してですが、華族革新派が目指した生き残りの政策には、それを支える行動の規範とか理念とかというものはあったのか、なかったのかという問題が一つ。そしてもう一つには、学習院の改革は、学習院の何が問題としてあったのか、また何をどう改革しよう

清水先生

としたのかということです。ご説明いただければと思います。

つぎに水田先生の報告についても同じようなことなんですが、貴族院が生き残りを図るために（生き残り戦略という点では理解できますが）、どういう行動の規範なり、思想なりというものがあったのか、あるいはなかったのか、そういう所について、貴族の歴史的な流れみたいなものを踏まえて、少しお話しいただければと思います。

渡邊　よろしいですか。今、華族革新派に生き残りをかけての理念というのがあったのかどうかというご質問が出ておりましたけど、後藤先生、その点からお願いできますか。

後藤　はい。理念と言いますか、今日の話の中でも少し触れているのですが、彼らの行動を、後付けてみると分かりやすいのは、とりあえず時勢に対して先手しようと考えます。いわゆる時勢論というのがあるのですが、とにかく革命は抑えきれない運命なので、時勢を先手しようという論理構成をします。例えば近衛文麿は、満州事変に対して、元老西園寺公望とは明らかに違います。西園寺公望は、満州事変は絶対にだめだというような感じですけれども、近衛はそうではなく、あれは日本の運命である、けれども軍部が独走してやったのがいけないのだという論理を出してきます。これなんかは分かりやすくって、そういう時勢の先手をするというのが彼らの論理です。だから結局、先手、先手と言っている内にファシズムの先頭に立っているような状況にもなるし、戦後民主主義社会になっても、その先頭に立ってくるという、大変変わり身の早いことをやっていきます。背景として、先ほど触れたのですが、白樺派という文学のグループと彼らは学習院でほぼ同期です。黒木三次なんかは、両方に属しています。原田熊雄が『西園寺公と政局』を述べるときに白樺派の里見弴がまとめています。そういう意味で、白樺派の人道主義であるとか、ドイツ教養主義とかあるいは大正デモクラシー状況の中で、彼らは育っており、それが背景になっていると言えば、背景になっている気がします。

渡邊　それともう一つ、学習院の改革についての何が問題で、どういう風にしようとしたのかについてお願いできますか。

後藤　はい。当時の一般的な学習院改

革の議論というのは、学習院には当時大学がなく、それで高等学校までは学習院で、その後大学が無いから、東京帝国大学か京都帝国大学に行く。それはそれでいいんですけども、学習院大学を創ろうというのが、議論としてあります。ただ、木戸達が言っているのはそれではなくて、この学習院自体が古いと。それを大正デモクラシー状況に適応させていかなければいけないのだと。さらに段々話が瑣末になってきて、学習院の中の幹部に三人組みたいなのがいて、彼らが悪いんだということを、特に木戸がよく言っています。

渡邊　清水先生、よろしいでしょうか。

清水　結構です。

渡邊　よろしいですか。大正デモクラシー対応についての話がありましたけれども、それから、水田先生の方も生き残りのための理念というのは何か、という質問です。

水田　ありがとうございます。何と言ったらいいのかわからないですが、貴族院の生き残り戦略を彼らは考えていきます。先ほどもちょっと出ましたけれども、基本的には、貴族院議員たちは貴族院の中での多様性を重んじます。そのため、今回の改革に関するディベートに際しても、誰かが何かの発言をすると、次の登壇者がそれを褒めあげ、何かしらコメントをしながら、次の場へ、つまり自分の意見に話題を移していく様式をとっています。しかしその際も、意見の違いをことさらに強調したり先の登壇者の意見に対して厳しい批判を加えたりは、めったに行われていません。とにかく様々な意見を多様なままに、表立って論争とせずに残していきます。そういう意味では、改革に関するディベートの際にもあらゆる話が出てきます。これを踏まえてご質問にお答えすると、ある意味では、賛成派にせよ反対派にせよ、何かの思想や行動規範に基いて党派的に動いているわけではないのではないかと推察します。少なくとも現状では、私は「これ」という思想や行動規範を今のところ明確にみつけられていません。ただ、これは史料を読んだ際の感覚的な問題なのかもしれません。それこそ今回の報告前に院生たちとも話し合ったのですが、貴族院のディベートを読んでいると、どうしてもその多様性が、「似たような多様性」といえばいいんでしょうか、見えない薄皮で包まれたような何かであり、その中での多様性であったような印象を受けました。その意味では、一代貴族が入ってきているにもかかわらず、貴族院の中で以前から培われてきた文化規範、あるいは文化資本のようなものを前提とした議論、外部の人間にはピンとこない何かがあるような、そんな話し方がずっと続いてしまうかのようです。その意味で何かしらの言語化可能な規範や思想が彼らに共有さ

李先生

れているのかもしれませんが、今一つそこにたどり着けない、そのような印象を史料からは受けました。そのため、明確に理念といえるものはないと思うのですが、ただ外部の人間には理解しにくさが残るような、そういうものはあるように、私には思えています。

渡邊　何か分からない何かがある、というお話になっているのですが、同時代化の話や外からの現代化圧、それから内圧、同時代化の内圧という、それに対する、対応する理念とかそういうものは、要するに自分の存在を説明するということになっているのですかね。

水田　貴族たちが自分の立場や不変性の重要さを説明するために一番意識したのは、パブリックオピニオンです。改革に関するディベートでも、彼らはそれを話題によく取り上げています。そういう意味では、彼らにも世論に対して説明し理解を得るべきという意識はあります。院外からの視線も何かしらの圧力として貴族たちは感じているのですが、それを何か一つの行動規範や思想に従って行っているとまでは言いきれないのではないかと考えています。一応、今回は賛成・反対、積極的・消極的という形に報告では分けましたけれども、その境界も実はあやふやです。例えば白書に対して、改革には賛成である、但し白書には反対であるという意見と、白書にも悪い点はあるが、改革には賛成するしかないという意見は、ニュアンスが違うだけで、ほとんど指摘されている内容は同じであったりします。力点の置き方の問題ではあるのですが、その意見の微差をどこまで大きくとらえていいものか、どこで区切って括っていいのかはとでも難しい課題だと思っています。

渡邊　ありがとうございました。先ほど、李先生がいくつもかなり議論の対象になるような、疑問点をお出しになっておられました。それを材料にしながら、会場の方からも意見をいただきながら、議論を進めていきたいと思います。李先生、先ほど質問してくださった内容をもう一度コメントしていただけますか。

李※　失礼いたします。問題提起は3点です。1点目は、世襲貴族以外の人間が貴族院に参加することに関する問題です。日英ともに貴族院改革が議論されましたが、日本では勅選議員の拡大が提案された反面、英国では一代貴族の縮小が訴えられました。そのスタンスの違いはどこ

から来るものなんでしょうか。それはそれなりの理由があってコンテクストがあると思いますが、それぞれどのような理由で、またその逆が成立しないこともそれぞれ理由が恐らくあるのでしょうね。その点について、ちょっと補足頂ければということです。2点目は実は今のやり取りで、大体解決できたと思うのですが、その当時の情勢認識の問題です。時代の変化をどれくらい敏感に感じて、このような思考を持つようになったのか。またイギリスの方でも、例えば貴族院の改革に賛成する側の主体というのが、先ほどの後藤先生の発表のように何か世代とか、特定のグループ、特定の個人が出てくるのかどうかということが少し気になったところです。3点目は貴族院の運営や、構成そのものよりは、貴族制度というのがその社会の中で、どうだったのか。特に貴族・華族自身はどのような認識を持っていたのか。さらにこれを展開すると、君主制や王権、あるいは議会といった中で、貴族としての存在と役割などについて、どういう認識を持っていたのか。という3点になりますね。よろしくお願いいたします。

渡邊　後藤先生の方からお願いします。

後藤　三つとも言っていいでしょうか。まず、貴族院の改革について、そもそもこの貴族院の何が原因かというときに、華族達は、原敬内閣の時に貴衆横断政策というものがあって、衆議院だけ多数派にしても、安定しないので、貴族院の方でも研究会という会派を与党化したということがあったのですが、それが問題なんだと言っています。研究会には子爵、伯爵もいるのですが、山県有朋系勅選議員が、むしろ幅を利かせていて、彼らがいけないんだ、というような考え方を根本的に持っています。ですから、華族の側の貴族院改革というのは、そういう政党政治に対する反発です。政党政治が、貴族院の方に波及していると考えて、だから、無色透明の華族の方がよいという論理につながっていきます。貴族院の再編の過程でどうするかというのはいろんな議論があるのですが、当然華族の数も減らさないといけないというのはあります。ただ、必ず出てくるのは、勅選議員みたいな、時の政府によってどんどん選ばれてしまうのがいけないんだという議論です。それではどうするかと言った時に、一番有力な議論は、職能代表制という、それぞれの職の代表者を持ってきて、明らかに衆議院との違いを出すという案です。結局その辺はうまくいったとは言えないのですが、しかし、それが戦後参議院につながっているような気がします。参議院の時も、必ず衆議院のチェック機能という議論があり、職能代表になっていないのですけれども、それが発想としてあります。緑風会という会派が参議院にできるのですけれども、貴族院改革の

議論を会派として体現するとこうなるのかなという印象を持っています。また、戦前日本の上院の役割というのは、参議院と比較しても貴族院というのは権限が大きいです。それは、自由民権運動に対抗して、仮に衆議院が自由民権派に占拠されても、政府・軍隊は運用できるように作っているからでしょう。ただ、大正・昭和になりますと政党政治へのチェックとしてあまり表に出すぎると、それが反発となって、第二次護憲運動とか枢密院に対する反感となって返ってくるので、それを近衛たちは恐れて、よほどの事でない限り、民意には反しないで、時勢を捉えて動くべきだと考えています。それから、世界の情勢認識について、特に社会主義に華族が共鳴したかという所ですが、共鳴していないと思います。個別の所では共感しているのですけれども、『有馬日記』などから彼らが行ったものをみていくと、例えば部落解放運動をやっていますが、あまり過大評価しない方がいいと思います。部落解放問題の研究分野で、有馬たちが組織した同愛会を、水平社を相対化するという意味で、一時期高く評価していた時がありました。しかし、『有馬日記』が出たときに、これは違うというのが分かってきました。彼らは自分たち華族の事しか考えていない。例えばコミンテルンとかありますけれども、それに共感はしてないです。その下の世代で、華族赤化事件というのが出てきますが、むしろ木戸幸一は宗秩寮総裁として取り締まっています。また、近衛文麿なんかは、近衛新体制は社会主義のような要素を持っているのですが、彼は独特の陸軍観があって、陸軍というのは皇道派と統制派があって、統制派には赤化、共産主義者が入り込んでいて、これが二・二六事件後、軍を牛耳って日中戦争になってしまったのだと思い込んでいます。だから、それを牽制するために、もう実在しない皇道派を重用しようとします。いつの間にか荒木貞夫が文部大臣になっているとか、何故か真崎甚三郎が終戦工作に参加しているとか、こういうのは、近衛の独特な陸軍や共産主義に対する考え方からきています。先ほど少し言いかけましたが、彼は保守だと思います。彼らは、戦後象徴天皇制を支持しているのですけれども、それは象徴天皇制が早い段階で日本社会に定着していくことも関係があると思います。三つ目の点ともつながってくるのですが、そもそも彼らは華族制度とか、君主制をどう思っているのかについてですが、それは悲観しています。華族制度はそのものがいけない、無くなるものだと思っています。「華族制度」の生き残りをやっているのではなくて、「華族」の生き残りをやろうとしているのです。だから、むしろ成功したのです。自分たちは殺されると思っているので、殺されないために社会事

業をやっています。もう華族制度自体は無くなってしまう。そう悲観して革命がおきると思っていますし、君主制についても、このままではロシアのようになってしまうと思っています。

渡邊　李先生よろしいですか。今、華族の生き残りの戦略というか、対処方法というのがロシア革命へのすごい危機感と、それからお話にあったように、時勢・先例論という先に先に動くという。それが社会主義的なものの考え方に、近寄っているように見えているということですね。そうではないけれども、そういうことを使って自分たちの生き残りを考えて、戦後になると確かに実際華族出身の人も多くいるわけで、先ほど私がお話したエピソードも、確かにそうだなあと思って、成功しているのかなという、だから制度としては無くなっているけど、華族は残そうとして、一応形として残っているわけですね。李先生、水田先生の方には同じ質問でよろしいですか。

李　はい、お願いします。

渡邊　水田先生、お願いします。

水田　ありがとうございます。一つ目のご質問、逆は成立しない理由ですが、その話は少々込み合っています。それは、誰からこの問題を見るかという話が関わってくるからです。例えば、世襲貴族側からこの当時、「もっと年齢が若い人間を入れていきましょう」「若い人たちの意見をもっと取り入れていきましょう」という提案が出てきます。一代貴族は何らかの業績や専門的な知識を持っています。例えば庶民院議員経験者だったり、何かしらの産業の社長職退任者であったり。そのような人が専門家としての見識を買われて貴族院に入るわけです。当然のことながら年齢は上がります。そのため、逆に若い人を貴族院に入れたいのであれば、世襲制をもっと重視すべきだと、世襲議員たちは言うのです。確かに数値を見ても、年齢構成を見ても、世襲の人たちの方が若くして貴族院へ来ることができています。彼らは各家庭で鍛えられ、政策担当者層としての考え方や視点を身につけるための訓練が既に終わっていると考えられました。そういう若さを貴族院に欲しいのであれば、世襲制をもっと推すべきだという議論を、世襲議員たちは立てたりしました。ただ、ではなぜそういった意見が反映されずに一代貴族が増やされるのかというと、一つは政治戦略の問題です。イギリスでは、貴族になることは名誉と認識されています。そのため、一代貴族に推薦されることは名誉なことだと捉えられますし、中には断る人もいるかもしれませんが、大体の人は爵位を拝領します。これが政治家の戦略に利用されます。庶民院議員を貴族に推薦して授爵させてしまえば、彼は庶民院をやめて貴族院に行くことになります。サッチャーが使った手段の一つは、これ

を政敵、もしくは保守党の対立派閥の人にぶつけることでした。そういった一代貴族を取り巻く戦略的な問題も含めると、恐らく内閣にとっては一代貴族を作った方が効果的であると考えられたのでしょう。そのような理由も含めて、二〇世紀のイギリスでは貴族の創設が行われていたのだと思います。また六八年以降、労働党が最終的には一九九七年に新しい貴族院改革を行うのですが、この三〇年間、なぜサッチャー・メイジャーの下ではそういった新しい改革の動きが出てこなかったのかという理由の一つは、この六八年に改革が失敗した後、労働党では一院制の意見、つまり二院制廃止論が大勢を占めたからです。この時代、労働党のマニフェストは一院制だったのです。議論自体は貴族院を廃止するというだけではなく、貴族院ではない第二院を作るというものもありましたので、これは一院制にすること、つまりは任命制をやめ、貴族院も公選化していこうという話、選挙で第二院の方も選ぶという考え方です。しかしそうしますと、庶民院との違いが無くなってしまいます。これは日本の議会と同じ形ですけれども、イギリスではそのようにすると違う価値観でのチェック機能も効かなくなるのではないかと心配されました。こういった二院制・一院制の意見の存在も踏まえて、折衷案として任命制で一応今は改革を止めておこうという議論もありました。そういう意味でも一代貴族の任命は戦略的に使われたと考えます。先ほどの質問の中で、一代貴族は一気に二千人ほども増やせるのではないかという話があったと思いますが、そういう可能性を含めて、与党になった政権は官僚にシミュレーションを行わせました。何人ぐらい増やしていくのがいいのかと。ただ、これも最終的にはその与党の良識にかかわる問題です。ですので、例えば、ウィルソンは一代貴族を一五二人作っています。それに対して、次の時代に出てきたサッチャーは二〇一人の一代貴族を作ります。メイジャーも一六〇人作ります。そうすると確実に保守党側が増えますので、その次のブレアは二八〇人の一代貴族を作るという形になりました。貴族院には問題があるという考え方がありながらも、実際的にはどんどん議員が増えていってしまうのです。こういったさまざまな条件があったので、現状では一代貴族を増やし、世襲を減らしていこうという流れになっていったと考えられます。二点目については、状況認識という部分、つまり改革の主体の話になってしまいます。今回の事例では、改革は政府側が行っていますので、主体は基本的には与党たる労働党の人たちです。彼らの提案に貴族側がのったのではないかと思います。その意味で六八年の話では、貴族院にいる議員たちの考え方は多様すぎます。貴族院にいながら共産

主義者だと自称する議員もいるくらいです。例えば白書に彼は反対します。その理由は、白書が任命制のままであることでした。「私は共産主義者なので、一院制、つまり貴族院は廃止してしまうのが筋だと思っているから、今回の改革にも反対する」と、彼は主張しました。このような点から、改革の主体は労働党政府であり、それに対する対応のような形で貴族たちが動いていたという印象を私は受けています。もちろん逆に、その客体のような存在の中から積極的な活動、もしくは政府の改革アイデアを巧みにいなす生き残りの戦略を生み出そうというモチベーションも出てきたのではないかと思います。最後の自己認識について。貴族たちは自分たちが社会に必要な存在だと思っていました。これは、貴族というより貴族院の話になりますが、その理由は、自分たちが果たすべき仕事が二つあるからであると考えていました。一つは貴族院に上がってきた議案を修正すること。実際、貴族院で修正がかけられた議案は、庶民院ではほとんど拒否されずに受諾されていきます。そのため、「我々は拙速な提案やおかしな文案を直すことができる良識の府である」という意識が彼らには非常に強かったのです。それからより重要な二点目としては、貴族院でのディベートを通じて、また先ほど新聞などの話もいたしましたが、それらの媒体を通じて、彼らは自らの主張を世間に公表していきました。意見を公にしていくことで、「世論に我々は影響を与えることができ、またそれが我々の仕事であると考えている」と彼らは言っていました。その意味で彼らは、自分たちが世の中に必要であり、逆に必要ではないと言われる理由が分からないという自己認識を持っていたといえます。おそらく貴族院にはお金がかからない、国庫負担が少ないということも重要で、それが、長らく貴族院が存続できた理由の一つだったとも思います。しかし、それ以上に、彼ら自身、自分たちは世の中に絶対に必要だと認識していたのではないかと思います。

渡邊　ありがとうございます。お話を伺っていると、イギリスの場合は六八年の法案の廃案ということに関わって、様々な議論が一つ転機になっている。つまり生き残りのための廃案であったのだと考えられると思いましたが、一代貴族などは様々なメディアを通じて自分たちの自己アピールのようなことをしている。ひょっとすると、六八年の法案の廃案を機に、さらに進めていったのかなと思いながら聞いていたのですが、そういう理解でもよろしいでしょうか。存在する、生き残りのための法案、方法というか政策として策略として。

水田　先ほどの清水先生の質問に対して私が言い淀まざるを得なかったのは、

おそらく彼らが積極的にこうしようと行動したわけではないからです。結局のところ、世襲貴族たちは生まれを利用して、何とか当面をごまかしていくような形での生き残りを続けて、その結果、無事に生き残っていったというイメージで捉えるのが一番わかりやすいのかなという気がします。例えば、先ほどの報告の際にメディアの話を挙げましたが、新聞などには彼らは昔から投書をしており、自分たちの意見を新聞に載せていました。これと同様に、テレビやラジオという形で貴族院改革の話や貴族院の中の話を発信していくにあたって、メディアをアンケートにどう利用するのか、それがどういう意味を持っているのかを考えて、自分たちの生き残りに利用することになっていったと思います。

渡邊　それが同時代化ということなのですね。

コメントのなかで、清水先生は、伝統的な士大夫社会を堅持しようとするような保守主義のなかで、「中体西用」論というものを掲げることで、士大夫社会を再編成して、それを存続させようとする動きがあったのだ、というお話があったと思いますが、これは本日の日本とイギリスとの御報告と兼ね合わせると、どのように解釈できるのでしょうか。

清水　まず、比較をする時代の対象が、東アジア社会の近代の特殊性、いわゆる欧米列強によって侵略されている国家・地域という状況のなかにあったということ、また中国（清朝）が東アジアのなかで特異な位置を占めているという状況があります。そのため、そういった意味で言うと、本日のテーマとなっています問題と、どこで、どうかみ合うのかというのは難しいです。

ただ先ほどお二人の先生に生き残りをかけた理念とはどのようなものであったのかについてお尋ねしましたが、そのかかわりで申し上げますと、中国の場合、近代化＝西洋化を受け入れつつも、それに抵抗する考え方として、伝統的な儒学に基づく学問の本体を堅持し、西洋の近代化の思想を補助学として位置付ける、そういう形で直截的に西洋化＝近代化に抵抗する論理、つまり「中体西用」論というものが存在しました。こういう清末の中国の状況を踏まえたうえで、日本やイギリスにはそういう論理・思想があったのか、なかったのかをお尋ねしたわけです。

ところで時代的にみて共産党の支配する今の中国に、こういった保守主義があるのかどうかについては、調べたことがありませんので分かりませんが、一般論的に中国の近現代社会を概観してみますと、中国社会の流れにある共通項を読み取ることができます。本題から逸れるかもしれませんが、お話してみます。

共通項といいますのは、中国社会を一

貫して支えてきたのは士大夫あるいは読書人であり、そこから生み出されてきます官僚層であったということです。今流に言い換えれば知識人層です。近現代史における中国社会もそうでした。孫文の同盟会・国民党の政権、蔣介石の国民党政権、そして今の中国につながる毛沢東・周恩来らの共産党の政権もまた、ある意味において知識人の支配する社会です。彼らが主張する国家建設の理念は国家主権・国権主義であり、それが全面に出されて展開されてきました。しかもそれは一党独裁体制を基本としていますし、それを支えていたのは士大夫層であり、知識人層であり、官僚層なのです。先ほどのコメントのなかで言いましたように、二十世紀初頭以来留学が奨励されるなかで、日本や欧米に留学した士大夫層・知識人層・官僚層が中国社会や国家権力の中枢を支えてきました。例えば一九二〇年代、三〇年代の中国国民党を支えた官僚達は、ほとんど留学組で、海外生活を経験しています。彼らが近代的な専門知識を身に着けたエキスパート・テクノクラートとして、国民党や共産党の政権を支えて国家運営をしてきたといっても過言ではありません。そういう色合いを最も強く持っていたのが蔣介石政権を支えた官僚層です。彼らは、士大夫意識をもって留学経験をしたがゆえに、伝統的な中国文化、儒学というものを基底、根底に持ちつつ、近代化を推し進め、政権を運営してきたのです。

こういう中国の近現代社会の状況を踏まえて、お二人の報告を聞きながら思うのですが、議会制度の位置付けも、そのあり方も、基本的には日本や欧米とは大いに違うように思います。孫文や蔣介石らの構想した議会制度や現中国の人民代表大会（これは議会に準ずるものとして位置づけられていますが）は、人民主権よりも国家主権を優位に位置づけ、一党独裁体制のなかで構築されたものです。そのなかで保守主義はどう現れるのかは研究課題として面白いものがあるように思われますが、ひょっとするとそれ自体が保守主義を再生産しているのかもしれません。

今の習近平の共産党政権は、彼も彼を支える幹部党員も革命の第三世代に属し、海外留学の経験を持つ、高学歴の知識人層であり、現代中国もまた近代的な専門技能を有するエキスパート・テクノクラートの支配する社会といえます。ここにも中国を支えてきた伝統的な士大夫社会、知識人社会、官僚社会の再来を彷彿とさせるものがあります。

こうした政権を持続的に保持することを可能とする中国の政治社会のシステムは、ある意味で歴史的に継承されてきたものです。それにあえて抵抗した事例として挙げられるのは、一九七六年と一九八九年の四月に起こった天安門事件です。

民衆が自由と民主と人権を求める闘いを、時の共産党政権が軍事力で弾圧した事件であす。その闘いは、人民主権、天賦人権論に基づく思想に支えられたものです。言い換えるならばそれは、アジアの近代が模索した、欧米の主権在民・社会契約論・革命論に基づく近代政治思想であり、それはまた国家主権に立つ政権の保守主義に抵抗する思想でもあったのです。

本日のテーマは、私の専門とする所ではありませんが、こうした課題にふれる機会を与えていただき、新たな知見を得ることのできる可能性を秘めた面白い視座だなと思いました。求められた質問の答えになってはいませんけれども、以上です。

渡邊　ありがとうございました。李先生、何かございますか。

予定の時間より大分オーバーしているようでございますので、もう少し議論を続けたいとも思いますが、とりあえずディスカッションはここで一応終了にしたいと思います。私も、近代も英国も中国も全然分からない状態で司会を進めさせて頂きました。若干不手際もあったかと思いますが、最後までご清聴、議論に参加してくださり、ありがとうございました。これで一応締めたいと思います。ありがとうございました。先生方、ありがとうございました。

（拍手）

※本シンポジウムでは李昇燁氏からもコメントをいただいた。李氏のコメント内容については、討論のなかで改めてご説明いただいたので、討論内容をもってコメント原稿に代えさせていただいた。